

呪いの話



【なまなりさん】
中山市朗著
メディアファクトリー
Fナ
中央ほか所蔵

体験者によって語られた呪詛と崇りにまつわる物語。陰湿なイジメにより追い込まれた女性が取った復讐方法。それは、自らの命と引き換えに相手を呪うこと。呪いをかけられたものを襲う、想像を絶する怪現象の数々。読後、呪いの恐ろしさに震撼しました。

こわい話

暑いこの季節。少し暑さを忘れられるような七つの怖い作品をご紹介します。

床屋の話



【剃刀】
(ちくま文学の森7「恐ろしい話」所収)
志賀直哉著
筑摩書房
908チ7
篠崎ほか所蔵

床屋の芳三郎は、剃刀名人。客の顔に傷をつけた事がないのが自慢。或る日、熱で朦朧としながら、客の髭を剃り始めるが――。些細な失敗をきっかけに、みるみる正気の外側へと踏み出していく描写は圧巻。静謐な文体がいつその恐怖をかきたてます。正気の内外の境界線の何と危ういこと！

子どもの話



【室生犀星集】
室生犀星著
筑摩書房
BF4
篠崎ほか所蔵

小さな子どもが訪ねてきます。男の子。目高をすくう姉のところに。夕方、門の前に。紅い塗のある笛を携えて。それは死んでしまった子ども。どうしようもなく隔てられてしまった家族。作中に満ちる、静かな哀しみに手を浸していると、時折恐ろしさが閃いて指先をかすってゆく、そんな感触のする短編集です。

京都の話



【怖いこわい 京都、教えます】
入江敦彦著
新潮社
291.6キ
篠崎ほか所蔵

千年のミヤコ、京都。長い歴史の中で、人の営みとともに生じた恐怖。それは、人々の作り笑いや景観の美によって隠されているという。本書はその京都の怖い部分を案内する裏観光ガイド。京都の怖いスポットが「寺院」「風景」「妖怪」など、9つのカテゴリーに分けて紹介されています。人気観光地の裏の顔を覗いてみませんか？

心の闇の話



【森に眠る魚】
角田光代著
双葉社
Fカ
篠崎ほか所蔵

始めは些細なすれ違いだったのに。心を許せる仲の良いママ友だったはずなのに。いつの間にか“対抗心”や“虚栄心”“嫉妬”に心を乱され、ママ友たちはお互い疑心暗鬼に陥っていく……。どんな人の心にも“闇”は隠れている。お化けよりも、本当に怖いのは生きた人間の心の奥なのではないか。

そのメロディに魅せられて♪

落語だって怖いんです。小三治はまくらが長くて有名ですが、今回も例外じゃない。でもまるっきり本題とかけ離れているわけではないのです。いいかげん油断していると、いつのまにか本題が始まっている。夫婦二人で営む小さな居酒屋のある晩の出来事が語られますが、

「もう半分」

(「落語名人会11～柳家小三治3」収録)
柳家小三治 K7ヤ06338 篠崎ほか所蔵

つぶやくような低く枯れた声のいつそう効果的です。せっかくだから、このあとの内容は書かないでおきます。最後、さげがどんなふうにつけられるか、それは聴いてのお楽しみ。

人物ブックマーク

第十五葉 小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)

小泉八雲(本名ラフカディオ・ハーン)といえば「怪談」。ほとんどの人が抱く小泉八雲のイメージですが、八雲とはいったいどんな作家だったのでしょうか。

1850年(嘉永3年)ギリシャ生まれ。ヨーロッパで成長しますが、苦勞の末に19歳で単身アメリカに渡り、24歳で新聞記者となり外国文学の翻訳や創作を発表します。39歳のときに来日。横浜、松江、熊本、神戸、東京で、教師や記者として働きながら、執筆を続け14年間を日本で過ごします。54歳で逝去。その間日本の伝統、精神や文化について、多くの作品をもって日本を広く世界に紹介しました。

小泉八雲著作および関連本

【妖怪・妖精譚】	小泉八雲著	筑摩書房	B933ハ	篠崎ほか所蔵
【クレオール物語】	小泉八雲著	講談社	B933ハ	篠崎所蔵
【ラフカディオ・ハーンの世界】	池田雅之著	角川学芸出版	930ハ	篠崎ほか所蔵

人物ブックマークとは、著名人とその著作および関連本を紹介するコーナーです。

八雲は様々なジャンル(小説、随想、散文詩、紀行文、再話など)の作品を著しましたが、なんといっても、日本の伝承や説話、昔話を英語に再話した作品が馴染み深いといえます。来日以後の作品に注目してしまいがちですが、アメリカ時代にも非西洋、異国文化への関心は高く、翻訳や再話などを書き残しています。

「雪女」「耳なし芳一」だけじゃない八雲の様々な作品に触れて、彼の文学の原点を見つけて下さい。

※昔話、伝説などを、言い伝えられたままではなく、現代的な表現に作り上げる。また、その話。(広辞苑 第六版より)

絵の話



【怖い絵】
中野京子著
朝日出版社
723ナ
篠崎ほか所蔵

本書で紹介されるのは、16～20世紀にドガ、ブリューゲルなどによって描かれた20点の西洋絵画。一目見ただけで、どこか薄気味の悪さを感じる作品ばかりです。その違和感の正体は、絵に添えられた解説によって暴かれます。名画の裏に潜む悪意、狂気、欲望。恐怖と共に知的好奇心も満たしてくれる一冊です。

日記の話



【かげろう日記】
吉村達也著
角川書店
BF3
小岩ほか所蔵

学生時代の恋人の茜と別れた輝樹は、その10ヶ月後に彼女が不慮の事故で死んだことを知る。別れを決意した頃の息苦しさから解放された輝樹の元へ、ある日、差出人不明のノートが郵送されてくる。それは茜の日記だった。そこには輝樹に捨てられた彼女の驚くべき秘密が隠されていた！ 読み進めていくうちにじわじわやってくる恐怖が堪りません！！